

鳥城

第80号

令和3年6月発行
(2021年)

発行
岡山県俳人協会

事務局

〒700-0824

岡山市北区内山下
2-5-10 角南方

TEL (086) 223-7519

振替口座01380-0-102923

(年会費専用)

令和三年も総会を開けず

「コロナ禍のもと幹事会を開く」

岡山県俳人協会会長 曾根 薫風

令和3年度の活動方針を決める幹事会が、11都道府県に緊急事態宣言が発令されていた令和3年1月31日(日)に奉還町のりぶらで開催された。幸い岡山県は不要不急の外出禁止の自粛要請だけだったので、常任幹事に限定して参加を願ったところコロナ禍の中、大げさに言えば命がけで14人の方が出席してくださり無事開催することが出来た。景山副会長の司会で全員が発言をするなど、穏やかな会となり、重要案件が全て決定された。

- ① 42回大会について
 - ア 講師は昨年お願いした田中春生先生、募集句なども従来と同じ形で行うが、懇親会は中止する
 - イ 大会の当日句は賞品のみとし賞状は無しとする(昨年決めていたことの確認)
 - ウ 当日句選者は一部変更以外は昨年と同じ
 - エ 大会の諸々のことを決める幹事会(幹事全員)の決定
- 令和3年9月7日(火) 13時より奉還町りぶらで行う
- ② 合同句集十六集について
 - 担当は磨家泉さん、編集委員に二司能林さんが加わる
- ③ 役員改選について
 - ☆ 辞退のあった人以外は基本的に後2年は従来の体制でゆく
 - ☆ 常任幹事に小橋さち江さん、新幹事は次の5名

大津千代子さん・小林克己さん・田中立花さん・中山敏子さん・「もも句会」から山本哲史さん
思えば昨年2月からコロナに振り回される一年であった。表むき何もなかったように見えるが、事務局長の角南さんをはじめ、役員は大変であった。今までにないことへの対応で決断を迫られた。コロナ以降は、今までは違う形で会の運営はなされるであろうと思う。
さて、私が会長に就任した時「組織は人なり」と会員増加のご協力をお願いしたところ、現在261名になった。数は力。益々仲間が増えますように皆さまのお力添えをお願いし、秋にはコロナもおさまり、今年こそ大会が無事実施できますように祈りたいと思います。

- 令和3年度事業計画
- 1 第42回俳句大会 10月17日(日)
 - 講師 田中春生先生
 - 会場 国際交流センター
 - 募集要項は5月に発送
 - 募集案内は8月に発送
- 2 合同句集第十六集
- 3 会報「鳥城」6月と12月に発行
- 4 吟行句会 秋季 11月14日(日)
- 5 会員名簿 6月に発行



句会紹介「運河」

写生をモットーに

小橋 さち江

現「運河」の主宰、茨木和生先生は、右城暮石から運河の主宰を継承されました。

運河岡山は、平成二十年六月三十日に結成され、当日には主宰と編集同人の五人の方々が出席して下さいました。

句会は杉本征之進支部長を中心に、国際交流センターで、毎月第二月曜日の午後一時から午後五時までと、毎月第四月曜日に吟行句会を開催しています。支部長の指導は句会、吟行句会共に懇切丁寧で会員一同心を高めながら精進しています。

現在の会員は十五名です。コロナ禍のため出席者の人数が少ないのですが、不在者投句で句は全員欠けることはありません。投句は五句、その内二句は兼題と題詠です。選句は七句。

選句は句会の醍醐味で一番の勉強になります。全句について作意を大切にし、出席者の意見も取り入れながら添削・講評をします。高得点の講評は勿論ですが、そうでない句や初心者への配慮もなされます。

ところで「運河」は先師暮石の提唱された、俳句理念「不易流行・写生第一」をモットーとして継承していますので、「季節の現場に立つて、心に感じたものを詠いなさい」の教えを肝に命じてこれからも頑張っていきたいと思っています。



猫柳一揆の村の一揆の碑
 水温む鯉にも序列ありにけり
 子の居らぬ島に新らし組木雛
 水掻の押しやる春の水かな
 からつぼの雛の火桶をまた覗く
 雪降れば雪を見に行く閑居かな
 露の臺出会ひを愛でつ食卓へ
 籠りあても夢はみちのく春の旅
 源流の合流地点猫柳
 連山の噴火のごとき芽立ちかな
 啓蟄のてんとむしだまし輝ける
 古雛の狎曳く官女色褪せず
 春寒や通院のみの薄化粧
 漠検に挑む八十路に春の風
 春浅しワクチン接種始まりぬ
 この様に、恵まれた支部長と前向きに頑張る
 会員と共に「奥の深い五・七・五」の道を今後も
 楽しみながら精進して行きたいと思えます。

征之進 尚子 幸子 那実 恒子 修志 幸彦 千代子 一心 陶子 千恵子 玲子 敏子 さち江

俳句雑話④ 日本人はみんな詩人

安光 穎耳

来日した外国人は新聞に短歌・俳句欄があつて、莫大な人がそれに応募していることに驚くそうだ。外国では詩人と読者は別々で、読者が詩を作ることは考えられぬと言う。日本最古の歌集萬葉集を編んだ大伴家持は上は天皇から下は乞食、遊女の歌を、更に東歌、防人の歌まで集めた。鎌倉時代に藤原定家が小倉百人一首を選んで、これが後に百人一首カルタとなり、正月には欠かせぬ遊びの一つになった。一方で室町時代、能楽や茶道などの芸能が流行するともに、和歌は宗祇、宗長等によって連歌となり、山崎宗鑑によって歌語の桎梏を解かれて俳諧となり、庶民でも容易に参加できる文学的な遊びとして流行したが、やがて貞門・談林の低俗に陥った。この時芭蕉が新風を唱えて俳諧を文学の域に高めた。明治時代になり正岡子規は西歐思想の影響の下に、文学は個人のものであり、複数の人が座を作つて成立する連歌は文学に非ざりと唱えて、その発句をのみ文学と認めてそれを俳句と称した。ここに三十一字の短歌と並んでより短い十七字詩の俳句が誕生した。

大伴家持が日本最古の歌集萬葉集を編み、これに多くの庶民の歌を集めたこと、藤原定家が秀歌百首を選び、これがカルタ遊びとして庶民の間で流行したこと、和歌から連歌、更に俳諧の流れの中で芭蕉が蕉風を確立し、俳諧の発句を正岡子規が俳句として独立させたこと、こうして十七字、三十一字の短詩形が出来、日本人は誰でも鑑賞だけでなく詩を作り得るのだ。

『藤田 桜 句集Ⅲ』

守屋えい子

布コラージュ作家の藤田桜さんが三冊目の句集を上梓されました。

藤田さんは、俳句結社「若葉」一筋に三〇年近く所属され創作活動をされています。第三句集も前版と同様表紙と季節ごとの頁には、ご自身の布コラージュの作品が配置されています。

日に透けて沙美の渚の桜貝
クロッカス大地より春擡げをり
おづおづと水面の落花寄り添ひぬ

日常の中での僅かな変化も見逃さず詠まれた作品六句を紹介します。

一句目、作者は昨年文化功労賞を受賞された御主人と四〇年余りのイタリア生活を経て、現在は倉敷の沙美に住居及びアトリエを構えています。家の前は大きく弧を張った沙美海岸の浜辺。お孫さんと一緒に散歩しながら拾った綺麗な桜貝。

二句目は庭のクロッカスの萌芽。寒い寒いと家に籠りがちでしたが春はもう直ぐ傍まで来ていると云うときめき。

三句目、水面に漂う沢山の桜の花弁を見つめその時の動きを捉えて「おづおづと」の上五が風のないゆつたりした水面を思わせます。

ようやくの風に風鈴大はしやぎ
素麺の紅の一筋うひうひし
しばらくは水喜ばせ水中花

軒に吊るした風鈴が突然鳴りだした驚き、そ

の音色に耳を捉われたのでしょうか。器に盛られた素麺の一筋の紅色を句材にした感性、水の中の白と紅の対比が印象的。水中花が次第に開いてゆく様子を中七の「水喜ばせ」の表現が読む者の心を身近にします。

鳥ひとつ手繰り寄せたし小春風
思ふことそれぞれ二人静かな
小手毬に毬をつかせるほどの雨
能舞台果て虫の音の幕が開き
効いてゆく麻酔も釣瓶落しなる

季節を受けての想像力、ひとつひとつが見過ごされそうな場面を詠んでいます。
一句目、自宅の窓から一望する瀬戸内海に浮かぶ大小の島々、のんびりと浮かんでいる島を手繰り寄せてみたい衝動。

二句目の二人静は、お二人の穏やかで互いを認め合う生き方そのもの。ちなみに二人静の花言葉は「いつまでも一緒に」です。

三句目は対象を見詰め得られたものでしょう。花の小手毬を手毬とみなし、ほつぽつと降る雨に手毬を突いているようなやさしい春の感じを詠んでいます。

四句目は薪能鑑賞の折でしょう。能舞台が果て鼓の音、足拍子の音も消え、余韻が残る中、次は「虫の音の幕」が上がるかと描いている。きつと涼やかな虫の音色だったのでは。

五句目確かに麻酔はあつという間に眠りに入る、その様子を釣瓶落しとは言い当てていて納得してしまいます。

羽子板の助六どこか父に似て
煮含めし栗の甘煮は母の味
広島忌嫁かずに逝きし友の墓
木の葉散るごとく逝きしと句友の訃

亡き人への思いも強い方です。三句目と四句目は同じ結社の句友を詠んだ句で、俳句を通して長く親交のあった方々です。

イタリアでの生活も長く沢山の思い出があるでしょうが、青春時代を過ごした下町にも思入れは強く浅草の句が目に留まります。

初夢や木遣音頭の江戸恋し
絆纏の芸妓も混り鏡割
獅子舞に泣く子逃げる子噛まるる子

卒寿を過ぎても周りの人への気遣いを忘れず、ことあるごとに「ありがとう」と言われる桜さん、こんな楽しい句も。

うららかやパンダ台からころげ落ち
ロボット展いでて秋刀魚を買ひにけり
これからも明るくお元気で、創作に励まれることを願っております。



森脇八重句集『梅あかり』

工藤 泰子

天と地の境はここぞ梅あかり

八重

梅がほころぶ頃「梅あかり」が届いた。その句集名は、ご主人が選ばれたと後書きにある。厳冬に耐え、春に先駆けて咲く梅の花の佇まいに、急逝したお嬢さんの姿を重ねてのことだったと聞く。

この事を心に秘めて読めば、〈天と地の境〉は何処にでも、誰にでもないことがわかる。「梅あかり」を感じる人だけに「境」があることを理解したい。

どこまでも淡い薄紅色の表紙に、ふつと潜在意識下の感情が溶け込んで見えるように見える。コトバはどこから湧いてくるのだろうか。言葉が、必然の様に眼前に立ち上がり、そしてそれは幾重にも語りかけて来る。

筆洗ふ水むらさきに涼新た

この句には、画家の目と俳人の目が水に注がれている。墨汁や筆ペンを使う私には「水むらさきに」ということは新鮮な驚きであった。松煙墨という本物の墨だから白い筆洗の水がむらさきになるのだ。

八重さんの水墨画は句集の後に写真で紹介されているが、精緻な筆の運びには優しさより厳しさを感じさせられる。作品を描き終えたあとの安堵感を〈涼新た〉と詠んだ。

薄墨に落款著き竹の秋

この句も、薄墨が出て来る。落款を押すと、作品は名前を持つことになる。〈著き〉と言いつく〈竹の秋〉の季語にもこだわりを見せた。

焙じ茶の香りつぎ足す夜長かな

おそらく古文書の解説に熱中されているご主人に、言葉ではなく、香りで心を寄り添わせているのだ。

夫の辺に常に古書あり去年今年

最近、歴史を裏付ける古文書の発見をよく聞く。現代人は、SNSやメールで、「今」をやり取りしているが、古い手紙や古文書からは、行間をあふれる肉声が聞こえてくるのではないか。去年今年という季語が永遠のようにも思えた。

他にも印象的な句を紹介したい。

待ち針に子の名それぞれ針供養

青き踏む心の余白埋まるまで
牡丹の芽つまづく風にみがるる

十葉や負けず嫌ひの子に育ち
折り鶴の千々にも言ふ原爆忌

敗戦忌しるべとしたる父のこゑ
とうすみの影ともならず吹かれをり

母を呼ぶ声風となる大花野
コスモスのいづくが風の震源地

藍といふ色たたみゆく秋の潮
しばらくは花の化身となりて座す

いつのことだろう。花の一生というドラマがあると、化身となるのは、花あかりの中

である。花が散るときには、次の準備ができてるときだ。次の波、次の風……自然との存問はつづく……



第42回岡山県俳人協会俳句大会

日時 令和3年10月17日(日)

会場 岡山国際交流センター
講師 田中春生先生

昭和28年生まれ
「朱雀」主宰

「香雨」同人
公益社団法人俳人協会幹事

句集「シユプール」「直幹」
「山花」

演題 「客観写生の射程」

応募句締切 6月30日(水)

第十五集合同句集鑑賞 2

俳句は心の鏡

赤木ふみを

葉桜や生徒を浚ふ始業ベル

小林 克己

葉桜の頃を人に準えるなら、少年から青年への伸び盛り。学校や友達にも慣れ、勉学や部活などが活発な時期でしょう。

始業ベルが合図となつて、校庭の生徒が一斉に教室へと走り、元気な話し声や急ぐ足音が聴こえて来るようです。「生徒を浚ふ」のが「始業ベル」との、擬人的な見立てが事実の描写を超え、真実の領域へと深めています。

デッサン的な写生の「見る」から、対象を見据える「観る」の心眼に映じる、豊かな個性と感性が発する実感の十七音ですね。

被災せし友より暑中見舞かな

安光 穎耳

穏やかで「晴れの国」と呼ばれる岡山においても、近年の自然災害は激甚で何処に於いて発生するか予測が付きません。

長年に亘り親しく付き合いをされて来た友人が、不幸にも被災されたのでしようね。連絡が途絶え、心に懸けておられた友人からの暑中見舞いは、前向きな知らせだったに違い有りませぬ。安堵の心奥を託されている、切れ字の「かな」がよく効いています。俳句の字面は何の思

いも述べられていませんが、「句またがり」の深層から滲み出る、作者の優しい詩心とともに、人柄が伺え心が和みます。

何気ない日常を詠む

角南 英一

ふくらんで薫るドリツプ花の冷

大倉 祥男

「ふくらんで」に直ぐ挽いたコーヒード豆がふつくと盛り上がつてくる様子を想像した方はかなりのコーヒード好きだろう。沸騰したお湯を専用のポットに移し替えて九十度に冷まし、そのお湯で二十秒ほどかけて挽いた豆を蒸らすのだ。瞬間部屋に広がる馥郁とした香り。まさに至福の時。外は花冷え。桜に想いを巡らしながら飲む一杯の熱いコーヒードは格別だろう。生活の一齣をさりげなく詠んだ句だがほっこりとした読後感がある。

美しくパスタ巻きとる九月かな

広畑美千代

これもよくありそうな日常の景を詠んだものだが、男性にはない女性ならではの視線が捉えた句といえる。たった一つの仕草にポイントを絞ったことによりとても余韻のある句になった。少し年配の品の良いご婦人、細くてしなやかな指、パスタを巻き取る無駄のない動き、などと読み手に勝手な想像が膨らんでくる。作者の狙い通りだろう。「九月」の季語の取り合わせもいい。例えば替りに他のどの月を入れてみてもしっくり来ない。何ともお洒落で爽やかな句。

やはり何気ない日常の中に佳句のネタは転

がっているのだ。

花野と天守より

島村 博子

一水の分つ花野と荒野かな

安光 穎耳

平明にして大景です。秋桜・桔梗・女郎花・芒・吾亦紅・藤袴などの花々が、一斉に風に揺れ、まるで「おいでおいで」と手招きしてくれているように心が躍ります。

作者もきつと、暫し佇まれたことでしょう。一方、小流れの向こうは、果てしない荒野です。もう手をつけられないほどの荒れようかもしれません。

若い人の減少で、荒野も増加の一途、その内原野に還るのでは…と今後の日本の盛衰を垣間見る心地も窺え深い趣の一句です。

天守より秋を三百六十度

難波 政子

天守からの眺望を「秋を三百六十度」と明快に謳われました。

天守からの大海原や大河・古戦場・武家屋敷等の見事な紅葉、加えて山並・街並・鯛雲など秋一色の息をのむような絶景に、私も立ち去りがたく、天守をもう一度巡った旅の思い出が脳裏を過りました。

更に崩落の熊本城や大火で全焼の首里城などこの世の無常も思い起こされ、感慨の一句です。今後もどうぞご健吟下さいませように。

想像力を刺激

一司 能林

秋天の刻の裂け目へ消ゆる鳥 清中 蒼風

春を迎えると、日本で冬を過ごした冬鳥たちは北を目指す。入れ代わるように南の国から夏鳥が渡ってくる。その夏鳥たちも秋になると南へ帰って行く。刻を計ったかのように……

人間の身近にあつて、空を飛ぶという特性のある鳥に對して、古来より人は特別な関心を持つてきた。その飛翔から靈魂と結びつけ、神秘的なものを感じてきた。

秋空に南を目指す鳥を見ている。ああ、鳥の姿があんなに小さくなった。鳥たちよ、無事に旅せよ。そして来年また元氣な姿を見せてくれ。「刻の裂け目へ消ゆる」の措辭が何とも鋭く、心打たれる。

月天心円周率といふ孤独 畑 毅

静寂な冬空である。円かな月が天頂に冴える。孤高な月に、寂寥感が募る。

満月が、円から円周率へと読者を誘う。円周率とは、直径に對する円周の比率。定義はシンプルだが、その数は、3・14以下循環することなく少数が無限に続いていく。

天心の月に自らの孤独を重ねた作者は、無限を思い、月までの遙かな距離、内に沈むたましいを思う。

円は、平面上で定点からの一定の距離にある点の集まりである。調和の象徴であるように思えるが、調和に潜む「無限という深み」を強く意識させられる。

日常の暮らしのなかに

原田 慶子

ひとり居の暮るるを待たず秋ともし 赤澤 孝子

秋の灯には春の灯の華やかさと違つて、じいんとしみる静けさ、人懐かしさがあります。

夕暮れ、特に秋の夕暮れは誰もが心淋しい気持ちになります。ひとり居であれば尚更でありましょう。しかし作者は、淋しさを感じつつも、負けないで、人懐かしくあたたかい秋の灯をとめます。中七「暮るるを待たず」に、前向きで堅実な暮らしぶりがあらわれています。

明るく灯した厨で一人分の夕食を丁寧に作っている姿が目に見えるようです。亡くなった方への鎮魂の気持も伝わってきます。

花の風入れて再び生家閉づ 岸 しのぶ

空家となつている生家の管理をするのは大変です。「再び」とあるので、折りに触れ通つて生家の様子を見ておられるのでしょう。

窓を開け放ち、風を通し、外回りの点検、庭の手入れ。忙しく働いた後、縁側でほっと一息つくと、生家での日々が思い出されます。父母のこと、兄弟のこと、お花見、入学式など、どれも懐かしく心が癒やされます。今は誰も住んでいない生家であっても、そこは心豊かに過ごした日々への思い出に満ちている場所なのです。「花の風」に象徴されていると思います。

磨かれた感性

大塚 功子

身ほとりのものを減らして立夏かな 向山ちか子

一時テレビや書物で断捨離という事が言われました。なかなか物を減らす事は難しく、筆筒や押入れに残つてしまいます。

この句の「身ほとりのものを減らして」とあるように、それから後は引算の生活をして身辺を片付けながら、物だけでなく心の整理までされたのではないかと思えます。

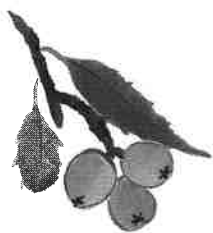
季語の立夏により、爽やかな気分でこれからを前向きに生きていこうとされる作者の強い決意を感じることが出来ます。

春愁やこころのドアの半開き 山県 章宏

眩しすぎる春の光、草も木も生氣溢れる季節ですが、ふと悲しみや憂鬱な感情に陥る時があります。春の気怠さからくる感覚なのかもしれません。

この句では、その淡い愁いを「こころのドアの半開き」と表現されています。この半開きという曖昧さが春愁のそこはかとない感情をよく表しています。

作者のきめ細かな感性と優しさを感じる事が出来る作品です。



夢と風

大津千代子

夢でだけ会える友たち著我の花 橋本 敏子

この句に友を思う作者の優しさと郷愁を感じました。私も病で亡くなった友と夢で再会した事があるからです。その時の心情と重なり共感を覚えました。もしかしたら作者の友は生存されて会えない何かしらの事情があるのかも知れません。どちらにしても日頃心に思っている事が、ある日、夢で叶えられる時があるのかも知れませんね。きつと夢の中で会った友たちは、仲良しだったのでしょうか。楽しい夢だったに違いない気がします。そして著我は山野草などで少し日陰を好みます。友だちを思う気持ちと、著我の花の清楚で控え目な佇まいが夢の友だちと重なり、一層引き立てている様です。又夢で会えるといいですね。

風を入れ一軒まるごと夏に入る 福武 昌子

一瞬で爽やかになって来ます。一軒まるごととは、スケールの大きさを感じとれます。家中の戸や窓を開け放ち風を通す。カーテンが風で揺れ、作者自身も風を受け生き生きとされている様子が浮んで来ます。もしかして、この方は人生を楽しみながら少しずつ断捨離されている。どの部屋も整理整頓され、風通しも良くなっているのではないのでしょうか。潔く、思い切りの良さはその辺りにもあるのではと、勝手な想像までもしてしまいます。家一軒まるごと衣替えして、今年も夏を迎える境地を作者に見た思いです。

工藤泰子随筆集

『やんぬるかな』

俳句独自の視点で

—山陽新聞 笠岡・井原・浅口圏板

2021年1月20日掲載より転載

俳人協会員の工藤泰子さんが、初の随筆集「やんぬるかな」を自費出版した。鴨方町文化協会俳句部が毎月発行している俳誌「遥照」への寄稿が100回を迎えたのをきっかけに刊行。身近な話題を交え、独自の視点と小気味よい語り口で俳句の魅力を伝えている。

工藤さんは1993年、俳人協会副会長の茨木和生氏が主宰する結社「運河」に入会。2014年の県文学選奨では、10句一組の「魔方阵」が最優秀に当たる入選に輝いた。「遥照」には08年に参加、同俳句部メンバーの勧めで12年から「やんぬるかな」の連載を始めた。

連載では漂泊の俳人・種田山頭火や津山出身で新興俳句の旗手といわれた西東三鬼らの名句を紹介。倉敷市ゆかりの作家横溝正史の「獄門島」について語った回では、俳句が連続殺人事件解決のヒントとなった点を指摘するなど、多彩なテーマを取り上げる。

随筆集は20年の遥照に連載した第103回までを収録。A5版で赤本(287ページ)、青本(319ページ)の2巻構成にした。表紙は自宅で保管していた曲亭馬琴の歳時記を基にデザイン。約200セット作り、浅口市内の図書館などに配った。

本のタイトルであり、連載各回の縮めの文句にもなっている「やんぬるかな」は「もうおしまいだ」などの意味だが、第3巻の発行を見据え意欲は衰えない。工藤さんは「次回を楽しみにしてくれる仲間の声が連載の原動力。奥深い俳句の世界はもろろん、精神的に活動する地元団体について興味をもってくれるきっかけになれば」と話している。

(松山慎二)



やんぬるかな 赤本 青本

原稿募集

会員の活躍、句会紹介、句集紹介、エッセイなど原稿を募集します。

なお、編集の都合上、採否や原稿の一部手直しはご了承下さい。(編集部)

会員の活躍

柴田 奈美

「俳壇」2020年 10月号

特集「どう詠み、味わう?」忌日の俳句」
誓子忌の夜は万蓄の星となれ 鷹羽狩行
を鑑賞

涼野 海音

「俳句」2020年 12月号 作品12句

「綿虫」

空を恋ふ駝鳥の眼秋に入る
石鱈はレモンの形小鳥来る
綿虫の波引くやうに流さるる
夕刊を買ふ裸木のまぶしさに

「第22回NHK俳句大会龍太賞入選作品集」

「父の背」

蜥蜴這ふ遙かに海の光りをり
父の背を越す向日葵となりけり
雲の峰懸垂できぬ少年と

「俳句界」2月号

「リレーエッセイ 今を詠む」VOL4「勇気」

北斗賞作家がそれぞれの「今」を詠むリレー
エッセイ。今回は「勇気」をテーマに寄稿

金重 智也

「俳句」2020年 6月号

「令和俳壇」

星野高士選 推薦
太陽に一病ありや蠶ぐもり

山本 一穂

「俳句」3月号

「令和俳壇」

小林貴子選 推薦
しづき立てて錆鮎の群れ鳥の群れ

新会員紹介

(「鳥城」第79号以降)

沖野 敏子(運河)

帰省せぬ孫とりモート薄化粧

上野 和子(白壁俳句座)

フットサルコート孤高の寒鴉

別所 琴美(馬酔木)

露の墓父にお酒を注ぐ夜

大塚 崇史(馬酔木)

急行の止まらぬ駅や風牙ゆる

訃報

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

内藤吐詩朗 令和2年2月4日

坂本 素子 令和2年12月21日

今後の主な行事予定

第42回俳句大会

10月17日(日) (詳細は4ページに)

秋季吟行句会

11月14日(日) 岡山城・後楽園周辺

会場 岡山県立図書館

編集後記

カット 佐藤史男



コロナに振り回されて過ごす毎日。俳句があるのに救われます。雨の音、風の声、今こそ自然の有り難さを再認識し、俳句に生かしたいと思うこの頃です。(石見邦慧)

前号は途中で中国へ行ってしまう、今号は校正のみの参加となり、申し訳ありません。コロナ禍下での俳句状況の記録も、大切な仕事なのだ実感しました。(内田ひわ)

岡山でもコロナの感染者が増え、近くへ買物だけの毎日です。歴史を振り返ると百年ごと疫病の流行があり、今丁度その時の様で、早く収束する事を祈るばかりです。

(岡本三恵子)

今年は四十雀が庭の巣箱に来なかった。ある日近所の庭木に新しい巣箱を発見。ご主人は療養中である。鳥たちはそのお宅の巣箱で、ご病人を慰めているのだと思った。

(原田慶子)

コロナ禍の中、昨年度は春以降の行事、今年度も総会、春の吟行句会が中止になりました。今号には、句集、随筆集の紹介、合同句集十五集の鑑賞など多くの方々から寄稿いただきました。ご自宅でご覧いただくことが多い今、ゆつくりとお読みいただけることを願っています。

(広畑美千代)